
小さな運命共同体

哀 l o v e コナン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな運命共同体

【Nコード】

N4767Z

【作者名】

哀loveコナン

【あらすじ】

短編集として書きたかったんですが、あまりにも長くなり過ぎて…連載にしました
予定していたものプラス少し加えて、コ哀小説を今度は連載していきます。

医療全く無視をしたコ哀です。ネタバレになるので、どっちなかで言っておきます。どっちなかの死ネタになりますので、ご注意ください読んでください。

前作見ていただいた方はわかると思いますが、またあの優しい先生が出てきます。

コ哀を好きな人にとっては怒られるかもしれませんが、嫌な人はここでスルーしてください。

そして、今回は一話一話が短いと思います…前作と比べると…それと、あくまでコ哀なので、新一や新一の両親などの登場はありません…服部も（今の段階では）出てこないと思います。

それを含め、大丈夫な方のみ…閲覧お願いします。

vol.1 プロローグ 運命…それは…変えたいもの

運命……それは、一人一人が神様によって授けられたもの…。

運命……それは、自分自身でどうにでも変える事が出来るもの…。

きつと、これもまた…”運命”なのかもしれない…。

”工藤君…私は貴方に…何もしてあげられないのよ…”

”お前は生きてくれてるじゃねーか…それだけで充分だよ…”

その言葉を交わした君と僕との間には…何があっただろう？…その言葉…ちゃんと君に伝わったのかな…いつだって、励ましていたはずだったのに…。

でもこれが…君と僕の…最後の物語になってしまったんだね…。

君の運命を僕は変える事が出来たのかな…本当に君は…それで幸せになれたのかな…。

でも、君にあんな運命背負わせなくなかったんだ…だから、君の運命を…僕が変えてあげたかったんだ…。

だから、お願い…僕がした事、許して欲しいんだ…。

そして…生きる事を諦めないで…お願いだから…なあ、灰原!!

vol.1 ブログゝ運命…それは…変えたいもの（後書き）

始めました。

ブログなので今回は短いです…。

読んでもらって嬉しいです。

今回は不定期になりますが、よろしくお願いします。

時間があれば、それほどあかず、投稿できるとおもいます。

また、今回もヒントを残して、
次に進みたいと思います。

次回ヒント
準備したい事

次回、またよろしく願います。

vol.2 診察結果

ある平日の朝…。

とある病院に来ていたコナンは、診察室で…蘭と小五郎が見守る中…医師によって、胸に聴診器を当てられていた…。

「うん…大丈夫だね。順調、順調…」

コナンの胸に当てられていた聴診器を離しながら、今度はコナンの頭に手を当てて微笑む先生の名は坂井医師…。

コナンが最も慕っている…コナンの主治医でもあった…。

「コナン君、こないだの話んだけど…そろそろ、準備したいんだ…返事聞かせてもらえるかい？」

「まだ、大丈夫だよ…」

そう話すコナンは何となく、淋しそうな表情を浮かべて俯いていた…。その様子に見兼ねた坂井医師は、コナンに言った。

「…ねえ、コナン君…先生、ちょっと毛利さんと蘭さんに話がしたいから…コナン君は先に戻っていてもらえるかい？」

「僕だけ…内緒の話？」

不安な面持ちで坂井医師の顔を覗き込むコナンを見た坂井医師は、につこり笑いながら…コナンの頭を撫でながら言った…。

「違っよ…コナン君が納得してもらえるように…相談しなきゃだか

ら…それに、早くしないと取り返しのつかない事になっちゃうからね…」

「…うん」

突きつけられた自分の現実には、コナンは納得しなくても、頷くしかなかった…。

そんなコナンを見た蘭はコナンの顔を覗き込んで、諭すかの様に話出した…。

「コナン君、大丈夫よ…すぐ行くから、病室でちゃんと待ってて…」

そう言われたコナンが診察室を後にした後、坂井医師は小五郎と蘭に話を始めた…。

「先日もお話ししましたが…コナン君の手術の準備をそろそろ取り掛かりたいと思うんですが…」

そう話す坂井医師だったが、コナンの事を思うあまり…自然と目が泳いでいた…。

「手術自体は、そう難しくないんですが…コナン君が手術を拒んでる今の状況では、こちらとしても手術を行えないんです…ですから、毛利さん達から説得してもらえませんか？」

コナンに病気の事や手術の事を話してから、コナンがずっと手術を拒み続けている事を坂井医師は心配していた…。

でももう、時間が限られている…そんなコナンの手術に、坂井医師は少しばかりの焦りを感じていた…。

「でも、先生…私達が言っても…コナン君、分かってくれないと思うんです…だから、先生から話してもらえるといいんですけど…」

蘭はコナンの性格を分かっていた…蘭達が手術の事を話しても”大丈夫”と言って、聞く耳を持たないかもしれないから…。

だから、先生からもう一度言われた方が分かってくれと、確信していた…。

vol.2 診察結果（後書き）

今晚ww

今日は変な時間に投稿ですww

一応、ストックが溜まって来たので

しばらくは毎日投稿になるとおもいますww

次回ヒント

哀ピンチ

次回もお楽しみに

vol.3 いなくなった小さな探偵と哀に迫る悪魔 (前書き)

今回、コナンは出て来ませんww

明日までお待ちください (。 111)

vol.3 いなくなつた小さな探偵と哀に迫る悪魔

「分かりました…」

蘭の頼みを聞き入れた、坂井医師はコナンにもう一度…手術の事を受け入れてもらえるように…蘭と小五郎を連れ、コナンが戻ったであろう病室に足を運んだ…。

コナンの病室の扉を開ける坂井医師は、目を見開いた…。

「あれ？コナン君？」

病室に戻るように言つたはずのコナンの姿がどこにもなかった…。

そればかりか、置いてあつたはずのランドセルが、見当たらない事に気付いて…坂井医師はため息を一つした…。

「あのガキ…どこ行きやがつた！！蘭、お前はここにいろつ…」

そう言つて、コナンを連れ戻しに行こうとする小五郎を坂井医師は止めた…。

「まあまあ、毛利さん…今すぐどうこういう問題ではありませんから…とりあえず、様子を見て見ましょう…コナン君ならきっと大丈夫ですから、帰ってくるのを待ちましょう？それに…」

そう言つて、腹を立ててる小五郎を落ち着かせた…そして、ひと呼吸置くと、再度口を開いて言つた…。

「行き先は…分かってますから…」

一方、阿笠邸では…自分自身に降りかかる悪魔が徐々に詰め寄ってる事に気づかず、哀はいつもの朝を過ごしていた…。

「博士…コーヒー、ここに置いとくわよ…」

「ああ、すまんな哀君………」

そう言うと、哀の差し出したコーヒーに手を伸ばし、それを口にするのを見た哀は…フッと笑い、嫌みをいいながら玄関へと歩き出した…。

「じゃ、私は学校に行ってくるわ…博士…私がいらないからと言って、高カロリーな物食べ過ぎないようにね…」

「分かっとなるわい………」

そういいながらも、残念そうな顔をする博士の顔を振り返って見た次の瞬間…哀は胸を抑えしゃがみこんでしまった…。

驚いた博士は哀に近づき、心配な面持ちで声をかけた…。

「哀君…どうしたんじゃ？」

「何でも…ハア…ないわ…ハア…いつもの事よ…ハア…すぐ治まるわ…」

「いつも？」

驚いた博士は、哀の発言に耳を疑った…。

「最近、良く…ハア…あるのよ…でも、大丈夫よ…ハアハア…心配…ないわ…」

苦しみながら、心配する博士を氣遣う哀…暫くすると、本当に苦しさは治まった様子で…強張らせていた顔も正常に戻っていた。

それに安心していた哀はゆっくり立つと、”ね？”といった感じで笑って見せた…。

そんな哀の様子に不安になり、哀に病院へ行く様に勧めた…。

「平気よ…それより、博士…工藤君から何か聞いてない？」

「新一？何をじゃ？」

「2日も学校休んでるのよ…まあ、博士が聞いてないなら問題ないと思うけど…じゃ、行ってきまーす…」

博士の心配をよそに、哀はなにもなかったかの様に平気な顔をして学校に向かった…。

閉まる扉を目にして、哀やコナンの事が心配になった博士は…暫くその扉の前で一人、佇んでいた…。

vol.3 いなくなった小さな探偵と哀に迫る悪魔（後書き）

次回ヒント

噂の人物

今晚ww

今年も残り3日になりましたね

今日はスペシャルばかりで、何をみようか迷ってしまいます。（

。111）

始まってまだ間もないこの小説なんですが、死ねたというのを了承して読んでいただき&お気に入り登録や感想いただき、ありがとうございます。

励みになります。

では、また明日の投稿をお待ちください

Vol. 4 噂をすれば…登場

哀が教室の扉を開け、入ろうとした時…歩美、元太、光彦は哀の姿に一目散に駆け寄った…。

「哀ちゃん！おはよー」

「灰原さん、おはようございます…」

話があると言わんばかりに、哀の顔をじつと見つめる三人に…哀は不思議に思いながら、平静を装って聞いてみた…。

「おはよ…どうしたの？そんな顔して…」

「哀ちゃん…またコナン君お休みだって…」

「えっ？？そう…」

言いたい事は分かっていた哀だったが、休みと聞いて…少しばかり心配が募っていた…。

「昨日、俺ら探偵事務所に行ったんだ…でもよ、家んなか真っ暗で…誰も居なかったんだよ…」

「何かあったんでしょうか？」

コナンの事が心配で堪らない少年探偵団…コナンが居るはずの探偵事務所に行っても誰もいないなんて事…今まで会ったんだろ…？

そんな光景を目の当たりにした三人が、不安がらないはずもなかった…。

哀はそれでも、心配させない様にと諭しながら話始めた…。

「何言ってるのよ…彼なら大丈夫よ、ただの風邪でしょ？病院にでもいったんじゃない？」

「でも…」

「だいたい、何かあったなら私達に言ってくるでしょ？そういう人でしょ？江戸川君は…」

そういつて、三人を凝視した…。そんな哀を見て三人は泣く泣く頷くしかなかった。

「はい、みんなー、席に着いてー出席を取るまえに報告です。今日もコナン君は風邪でお休みだそうです…でも、心配しないでね、ただの風邪みただから…」

小林先生は、教室に入って来るなり、教室にいる生徒達に報告した…。その言葉に、三人は騒ぎだし、後ろの席にいた元太が光彦に声をかけて来た。

「なあー、今日も帰り寄ってみよーぜ？」

「そうですね…」

「皆で行こー！ー！」

三人がそんな言葉を交わしている時…教室の扉が開いた……。

「おはようございます…」

顔を出したのは、噂をすればのコナンだった……。

「コナン君！ー！」

コナンの休む連絡を受けた直後の出来事だったので、さすがに皆驚いていた…。

小林先生がコナンに近寄り、自分の額とコナンの額を触り、見比べていた…。

「熱はないみたいだから、大丈夫そうだけど…」

「大丈夫だよ…もう治っちゃったから…」

「でも、無理しちゃダメよ？」

「うん、分かった!!」

そう言葉を交わすと、コナンを席に着かせた…。

席に着いたコナンは哀に”よっ”と、挨拶すると、哀は無駄な心配させられた事に不機嫌になり…瞳だけコナンの方に向かせると言った。

「余計な心配させてんじゃないわよ…」

「なんだお前、心配してくれてたのか…」

「私じゃないわ…あの子達によ…朝から大変だったんだから…」

「……」

哀にそう言われたコナンは、ゆっくり三人の方へ視線を移すと、三人は心配な面持ちでコナンの方を見ていた…。

vol.5 病魔の発覚

「コナンくん、哀ちゃん!!」

「帰りましょー!!」

「行こーぜー」

授業が、終わり…帰る支度をしているコナンと哀に向かって言葉が投げかけられた…。

「おう!…帰ろーぜ、灰原…」

「ええ…」

そう言つてランドセルを背負うと、五人揃つて…久々の下校を共にしていた…。

そして…これが最後の五人揃つての下校になるなんて、この時は知る術もなかった…。

「大丈夫ですか?コナン君…」

「ああ、平気だよ…悪かったな…心配かけちまって…」

「いえ…では、僕達こっちですから…」

そつ言う光彦を先頭に、曲がり道に差し掛かった三人は二人に手を降り叫んでいた…。

「また明日会いましょう…」

「哀ちゃん、まったね…」

「じゃーなー、コナン！！無理すんなよ！！」

そう言う三人に、コナンは大きく手を降り…哀は顔だけ向いて微笑んでいた…。

「わーってるよ、じゃーなー」

二人だけになって…哀は漸く本題を切り出す事が出来た。

「ねえ、今朝何で遅刻して来たの？」

「ああ、ちよつと寝坊しちゃって…」

分かりやすい嘘をつくコナンにジト目で見る哀は…目線を戻すと言った…。

「遅刻…それで私が納得すると思ってるの？」

「まあ、いいじゃねーか…あつ、じゃーなー…」

「ちよつと…」

丁度曲がり道に差し掛かり、哀の言葉を無視して…コナンは探偵事務所の方へ歩いて行った…。

呆れながら、哀もまた帰り道を歩いている時…胸の痛みを感じた哀は、ドサツと音を立てて…その場に倒れこんでしまった。

それを感じたコナンは急いで哀の元へ駆けつけた…。

「おい、灰原…どうした？」

「うつっ…痛い…胸が苦しい…痛いっっ…」

コナンは心配な面持ちで、駆け寄り哀に声をかけるが、哀は更に胸を押さえて苦しみ出した…。

「おい、灰原…しっかりしろ…」

「ううつ…」

「灰原！？灰原あああ——！！！」

コナンの叫び声が響き渡る中、哀はただただ、痛みに耐えていた…。

vol.5 病魔の発覚（後書き）

次回ヒント

治療中

こんばんわ、実は、この中に出てくる坂井先生はZARDから取り
ましたww

14年位、ファンなのです（＾ー＾）ノ

では、今日とっても寒いから、みなさん風邪に気をつけてくださ
いねo（＾　＾）o

vol.6 心配になるコナン

哀が倒れたのを目にしたコナンは急いで自分の携帯で救急車と、阿笠博士に連絡した…。

直ぐに救急車が到着して…コナンも一緒に付き添っていた…。

救急隊員による処置を施されながら、コナンは哀の顔だけを見続けた…。

病院に着き…ストレッチャーに乗せられ、治療室に運ばれる哀を追いかけるながら、賢明に声をかけるコナン…。

「灰原!!」

身長が足らず、哀の顔を見る事ができないコナンだったけど…哀の苦しむ声だけは耳に届いていた…。

「坊や、ちょっとここで待っててね…」

治療室の前まで来ると、看護婦さんがコナンに声をかけた…その声の一つ頷くと、治療室に運ばれる哀の乗ったストレッチャーをずっと眺めていた…。

「コナン君…ダメじゃないか、走ったりしちゃ…」

その声に振り向くと…坂井医師が何時の間にかコナンの後ろに立つ

ていた…。

「先生……」

「先生の勘違いだったみたいだね…コナン君が倒れて…自分で救急車呼んだのかと思って…毛利さんに連絡しちゃったよ…」

コナンの目線までしゃがむ坂井医師はコナンの顔を覗き込むと言った…そんな坂井医師の顔を一度見ると…再びコナンの目線は治療室へ向いた…。

「君の、友達かい？」

そう言われ、一度俯いたコナンだったが…もう一度坂井医師の顔を見ると言った…。

「先生…灰原…大丈夫…だね？」

「まだ、治療中だからね…担当の先生が出て来ないと分からないな

…」

「そう…」

コナンの頭に手を置きながらそう言う坂井医師の言葉を聞いたコナンは寂しそうに俯いた…。

「こら、コナン…!」

その時、連絡を受け蘭を連れてやって来た小五郎に、コナンは鉄拳制裁を下された…。

「痛いよ、おじさん!」

「あつたりめーだ!!!誰が学校行けって言ったんだ!!!病室に戻れ

って言っただろーうがー!!」

「お父さん!!! いいじゃない、ちゃんと戻って来たんだから…」

その光景に見兼ねて、坂井医師はコナンの手を握ると言った…。

「まあまあ、とりあえず一度診察室へ行きましょう? もう分かったよね? コナン君…??」

「うん…」

坂井医師の言葉に頷くと、コナンは頭を摩りながら…診察室へ連れていかれた…。

vol.6 心配になるコナン (後書き)

こんばんわ 〇ー、ー〇

今年最後の投稿となりました

今年も残すところwww

3時間切りましたねへ(^^)(ノ^^)ノ

ガキ使見てる人、紅白見てる人…それぞれですが…皆さんが気持ちのいい新年になるといいですね、

また、来年会いましょう(*´)(ノ;:・*+*・.:;/皆さん、よいお年を8(^^8)(8^)(8””

では、今年最後のヒントにいきたいと思います

次回ヒント

約束

ですww

新年初投稿をお楽しみに??

vol.7 僕の約束聞いてくれない??

「コナン君、息吸って…はい、吐いて…」

コナンは服をめくり、聴診器を胸に当てられながら…坂井医師の合図にゆっくりと呼吸をしていた…。

「先生…」

診察が終わったのを見るとコナンは静かに声をかけた…。

「灰原…」

「まだ詳しい事は分からないけど、さっきの様子だと、心臓かな…」

そう聞いて、俯くコナンを見ながらコナンの頭に手を置く坂井医師は静かに忠告した…。

「そろそろ、君も自分の事考えなきゃな…」

「……うん…」

そう言くと、コナンは坂井医師を見ると勢い良く言った…。

「ねえ、先生!!灰原の担当のお医者さん、先生になって!!お願い!!」

「えっ?どうしてだい?」

「先生だったら、信用出来るから…」

そう言い、俯くコナンを見ながら困った様に言った…。

「でもね、担当の先生は治療した先生になる事に決まってるからね
…」
「お願い!!」

そんなコナンは見兼ねた小五郎が口を挟んで来た…。

「先生を困らせんじゃねーんだよ!!」
「だってー」

「わかった!担当の先生に頼んでみるよ…で、その先生が承諾してくれたら…でもいいかな?」

「ありがとう、先生!!」

その言葉に、明るい表情を見せ元気よく返事をするコナンを見る坂井医師は、その先生が了承したらという条件で引き受ける事にした…。

治療を終えた哀が乗せられたストレッチャーを見送った後、担当の先生に駆け寄る坂井医師は暫く話した後、コナンの元へ戻って来た…。

「コナン君、今先生と引き継ぎしたからね…君の友達も先生が見る事になったよ…」

「よかった…それで、灰原は?」

喜びと同時に、哀の状態を聞くコナンに坂井医師は説明した…。

「心臓に、爆発を抱えてるんだって…だからね、その心臓が弱くなる前に丈夫な心臓と交換しなきゃならないんだ…」

「灰原死んじゃうの?」

「ドナーが見つければ大丈夫だよ…」

そういいながら笑顔を見せる坂井医師に、コナンは言った…。

「ねえ、先生…僕、ちゃんと自分の事考えるから…約束聞いてくれない？」

「……………」

坂井医師はコナンの口から出た言葉に耳を疑った…。

「それは、君が考える事じゃないよ…コナン君…」

vol.7 僕の約束聞いてくれない?? (後書き)

皆さん、あけましておめでとう

ございます(〃´、´、)人(´、´、〃)

今年も引き続き、小説サイトにて、
更新に励みたいと思いますので
よろしく願います(*^^*)

では、新年初の更新ですwww
読んでいるとわかると思いますが、
だんだんと、コナンが何を決めようと
しているかが、わかってくるとおもいます。

次回ヒント

涙

明日もお楽しみにww

皆さんにとって今年一年が素敵な
年になります様に

vol. 8 誰にも止められない涙

「阿笠さんですか？」

「はい、それで哀君は？」

「こちらです…どうぞ…」

コナンの連絡で漸く駆けつけた博士は先生の案内の元、病室に向かった。

「博士…」

「哀君…やっぱり、今朝病院行った方が良かったんじゃない？」

「仕方ないじゃない！！こんな事になるなんて思わなかったんだから…」

その会話に不思議に思ったコナンはベッドに近づき言った。

「今朝って…何かあったのか？」

「別に…たいした事じゃないわ…」

「教えるよ！」

「何でもないって言ってるじゃない！！！」

それ以上聞いても無駄な事を察知したコナンはそれ以上何も言わなかった…。

「灰原哀さんだね…これから君の治療に携わる事になった坂井と言います…宜しくね！」

「……」

坂井医師の挨拶に哀は何も言わず、不機嫌なまま凝視していた…。

「先程の治療でね…君の心臓が原因だと分かったんだ…まずはドナー登録をして、君の心臓に一致するドナーが現れるまで入院して待つ？先生も一緒に頑張るから…」

「ドナーが現れなかったら？私は死ぬしかないのよね？」

坂井医師の言葉に、涙目になる哀は興奮して叫び出した。

「知ってるわよ、ドナーの事！！一致する心臓なんて、一握りだそうじゃない！何年待ってもドナーが現れないで死んで行く人だっているのよ！」

「灰原さん！」

「いいのよ…もう…私は…死ぬのを待つしかないんだから…」

哀は両手で顔を覆い、酷く落ち込み泣き出した…。

それを聞いていたコナンは博士の名前を震える声で呼んだ…。

「博士…」

「大丈夫じゃ、見つかる…きっと…」

その後何度も坂井医師は励ますが、哀は一向に顔をあげてはくれなかった…。

「とりあえず、ドナー登録の申請をしよう…もしかしたら、現れるかもしれないからね…阿笠さん、手続きをお願いします…」

「はい…」

博士は坂井医師に連れられて病室を出て行った…。

残ったコナンは哀のそばに近寄った…。

「灰原…大丈夫か??」

「ええ…今の所は生きてるんじゃない?」

まるで他人事のようにいう灰原をコナンは元氣付けようとしていた…。

「大丈夫だよ、灰原…ドナー申請したんだし、きっと見つかるさ…」

「見つからなければ私は死に落ちるのよ…いい気味よね、本当…」

「やめろよ、そういう言い方…お前らしくねーぞ!!」

自分のことを卑下する哀にコナンは賢明に励ますが…哀の心には届きそうもなかった…。

「出てってくれない…」

「灰原…」

「出てってよっつ!!私の気持ちなんて貴方なんかに分かりっこないのよ!!…っ…」

そうコナンに叫んだ後、哀は再び両手で顔を覆って泣き出した…言葉を失ったコナンはただただ、哀を見つめるしかなかった…。

「また…来るから…」

そう言っつて、返事をしてくれない灰原を一人病室に残してコナンは静かに出て行った…。

病室の扉を閉め、寄りかかるコナンは俯いて拳を握りしめた…。

助けたくても助けられない自分の不甲斐なさを悔やみながら…。

vol.8 誰にも止められない涙 (後書き)

こんばんわwww

正月休みでダラダラしている

今日この頃ですwww

小説を毎日書いていると、突然

書きたい内容は頭の中に有るのに

言葉が出てこないって言う事が

ありますww

そついう時つて休んだ方がいいんだな

つて後回しするのが一番ですねww

正月ボケが祟ってるのかもしれませんがww

では、余談はこれ位にしてww

次回ヒント

帰ろう

次回もまた

よろしく願います。

p.s

始まってまだ間も無いこの小説にww

お気に入りや感想、ポイントいただいて

ありがとうございます。

それを励みに頑張って行きたいと思います。

よろしく願います＼(＾o＾)／

vol.9 言わなきゃいけない、最後のお願い

「コナン君……」

「お前ら……どうして？」

哀の病室の前で佇んでいたコナンは突然の訪問者に驚いていた。

「博士から聞いたんです……あの、灰原さんは……？」

「あいつ、酷く落ち込んでるんだ……だから、今はそっとしておいてやってくれないか??」

病室に目をやりながら、三人に話すコナンはなんとなく、悲しい目をしていた。

それに気づいた光彦はコナンの顔を覗きながら言った……。

「灰原さん、何かあったんですか??」

「……実はな……」

そう話そうとした時、コナンを呼ぶ声がして振り向いた……。

「蘭ねーちゃん……」

「哀ちゃん、どうしたの??」

蘭は病室に目をやりながら、コナンに尋ねた……。

蘭の問いに言いづらそうに俯いて、黙ってしまったコナンを見て……
何かあったと察した蘭は、にっこり微笑みながら、コナンに手を差し伸べた……。

「コナン君、帰ろう？病室に……」

そう言った蘭の言葉に、近くで聞いていた三人は驚きながら、聞いた…。

「病室って??」

「誰のですか??」

尋ねてくる三人に、コナンは勢いよく振り向き…蘭も三人の顔を見ると少し微笑んで言った…。

「皆も来て…」

そして、コナンも蘭の発言に焦り…三人に知られたくない一心で蘭に助けを求めるかのような細い声で名前を呼んだ…。

「蘭ねえーちゃん…」

「隠してても、いずれバレちゃうんだから…言わなきゃダメよ…皆にも聞いてもらおう?」

そう言った蘭の手を握り、仕方なく病室に戻る事にした…その後を黙ってついて行く歩美、元太、光彦は何が起こっているのか…不思議でたまらない心境だった…。

病室に戻ったコナンを待ち構えていた小五郎は蘭に手を引かれ戻ってきたコナンをニヤリと見て詰め寄ると言った…。

「よし、コナン！先生とこ行くぞ！！」

「まだ、大丈夫だよっ」

小五郎の言葉に、いつものように手術の事を言われるかと思っていたコナンはそう叫んで逃げ出した…。

そんなコナンをあっさりと捕まえると、小五郎はコナンを抱きあげると診察室へ向かった…。

「やだよ、おじさん！降ろしてよ！！」

「黙って来んだよ！！」

診察室の先生の所へ行くのが嫌で、行きたくないの一点張りの様子のコナンは小五郎に向かって叫んでいた。

そんなコナンの反抗も虚しく、診察室の扉が開かれた…。

「やあ、コナン君…今度こそ、聞かせてくれるかい？？君の返事…

……」

コナンに問いかける坂井医師の後ろから心配な面持ちで顔を出した、歩美、元太、光彦の存在を確認すると…にっこりしながら、コナンの頭に手を当てて言った。

「そうか、今まで手術を拒んでいたのは…友達に知られなくなかつ

たからかな??コナン君?」

「先生!!僕、先生にお願いしたい事があるんだ!!」

コナンに向けて微笑む坂井医師とは反対にコナンの瞳は真つすぐと、そして真剣に坂井医師の方へ向けられていた…。

「先生、お願い!!僕の最後の約束を聞いてほしんだ!!」

これ以上にならない真剣さに…坂井医師は、その瞳を暫く黙って見つめていた…。

vol.9 言わなきゃいけない、最後のお願い（後書き）

今日は凄く寒くなりましたね

まだまだ、正月気分が抜けず寒さを雑煮でしのいでいる。今日この頃です。

休みと言う事も、あり…この時間に投稿できるということもあり…もう一話、夜中あたりに投稿したいなあと思いつつ、自分の行動を制御しています。

では、次回ヒント

本気だよ

次回もまたお楽しみに

vol.10 コナンの強い意思と想い

「約束って、さっきの事かい？」

「うん!!」

コナンの真っ直ぐな瞳を見つめ、困った様な表情を浮かべる坂井医師は…コナンから目線を反らして言った。

「さっきも言っただけど、それは君が考える事じゃ…」

「分かってるよ!!でも、どうしても…守りたいんだ!!あいつを助けたいんだよ!!」

その会話に、何の話をしているのか分からない小五郎達は先生に問いかけた…。

「先生…あの、いったい……」

その言葉に、暗い表情を浮かべると…コナンを見つめた…。

「言っても、いいよ…」

コナンの言葉に、更に不安な表情を浮かべる坂井医師は小五郎達の方へ向き直ると、コナンに言われた約束を話した……。

「……………という訳なんです…友達の事を思う気持ちは分かりますが…とてもじゃないけど、承諾しきれません…」

先生からの話を聞き終わると…さすがに、驚きを隠せない様子でその場にいた全員がコナンを見つめていた…。

「コナン君…お願いだから、お友達の事は先生に任せて…君は手術をしてくれないかな…ドナーだって現れる可能性あるんだしね!!」
「現れなかったら？現れなかったら、あいつは死んじゃうんだよ!!
!だったら…」

「コナン君!!」

先生の説得も虚しく、コナンは頑として意見を変える様子もなかった。

それよりも、哀を守る事ばかりを考え…元太達や蘭の説得さえも決して首を縦に振ることはなかった…。

「お父さん…」

そして蘭が小五郎に助けを求めると、小五郎はコナンの胸元を掴み…睨みつけながら言った…。

「お前!!本気なのか!!」

「本気だよ!!」

「もう一度、考え直せ…後悔しても知らねーぞ!!」

「後悔なんてしないよ!!僕が決めたんだから!!」

「やっぱりやめるつつつても、もう手遅れになっちまうんだぞ!!
それでもいいのか!!」

「そんな事言わないよ!!」

睨みつける小五郎の言葉に、頑なに意見を曲げないコナンを見て、小五郎のコナンの胸元を掴む手に力が入る…。

「本気…なんだな！」

「うん！！」

小五郎のその言葉に勢いよく頷くコナンを見て、瞳を濡らすと…コナンの胸元を掴んでいた手を離し…コナンに背を向けた…。

「勝手にしろっ！！」

そんな小五郎を見た蘭はコナンの肩を掴み…自分の額をコナンの額に当てながら、潤んだ瞳を輝かせてもう一度ゆっくり話した…。

「ねえ、コナン君…もう一度、もう一度よく考え直して…貴方がいなくなったら、悲しむ人だっているのよ…」

「僕、もう決めたんだ！！あいつを守るの、僕しかいないから…最後まで、あいつを励まさないやいけなから…それに今、あいつすっごく落ち込んでるからさ…だから…ごめんね、蘭ねーちゃん…」

コナンの言葉一つ一つに重みを感じて…それ以上は反対できなかった…コナンの言葉を聞きながら、肩を震わせ…閉じた瞳から涙がこぼれ出していた…。

「どうして…どうしてコナン君は…」

そっぴいながら、コナンの小さな身体を抱きしめた…。

「だったら、精一杯…哀ちゃんの事、守ってあげるのよ？？」

「うん！！分かった！！ありがとっ、蘭ねーちゃん……ごめんね…」

もう、これ以上コナンにいくら説得したとしても…納得なんてしてはくれない…。

誰が何を言っても、決してその決意を捻じ曲げる事なんてできない…。

そう感じた一同は、コナンの意思を悲しくも、受け入れる事にした…。

この先、何があるうとも…コナンはこの時した決意を途中でやめる事なんてしないだろう…。

この先、なにがあるうとも…絶対に…。

vol・10 コナンの強い意思と想い (後書き)

こんばんわww

本日二度目の投稿になります。

休みだと、時間があつていいですね

その休みも、もうそろそろ終わるのですが…。

ところどころ、明かさない様な

感じには書いていますが、多分

そろそろわかつちやいます。

12話は特にwww

では、いつもの行きます(笑)

次回のヒント

すまない

では、また明日

お楽しみに

vol.11 コナンの覚悟に流れる涙

その様子を見ていた坂井医師は、コナンの方に向きを変えると真っ直ぐと顔を覗きこんで言った…。

「コナン君…私は医師として……君のいう事を受け入れる事は出来ない…出来ないけど……君はもう、意志を変えるつもりなんてないんだろ??」

「うん…!!」

再確認する坂井医師の目をじっと見て、真剣な表情のまま返事をするコナン…。

コナンのその目が、とても力強く…言葉を詰まらせられる…そんなコナンを見て、坂井医師はゆっくりと言い聞かせる様に話だした…。

「コナン君…今を逃せば、君の命を救う事が出来なくなる…この先、病状が悪化すれば、いくら手術をした所で、君を助けられないんだよ?分かってる??」

「うん!!」

そんな事を言っても尚、意志を曲げようとしないうコナンを見ると…坂井医師はもう…コナンを止める言葉を失っていた…。

「今は何もなく元気だけど…これから、少しずつ病状が進行する…今よりもずっと辛い思いをする事になるんだよ?覚悟はできてる??」

「うん!!大丈夫だよっその位、分かってるから…」

もう、何を言ってもダメなコナンに坂井医師は諦め、それならばと……コナンの顔を覗き込むと、真剣な眼差しで言った……。

「だったら、コナン君！これだけは守ってくれないか？絶対無理しないって……少しでも、体調がおかしいと思ったら、先生に言っ
てほしいんだ……」

コナンの肩に手を置いて頼む坂井医師の言葉に……少し俯くと、静かに言った……。

「ダメだよ、ダメだよ先生……少し位無理しなかったら、あいつに……灰原にバレちゃうじゃない……」

「えっ？じゃ……灰原さんには……」

「うん！灰原には……僕の病気の事も全部……黙っててほしいだ……！あいつに言ったら絶対反対されるし……それに、いつか言えたら言おう
って思ってるからさ……」

そついい終わると、コナンは坂井医師に笑顔を見せた……。

そんなコナンの浮かべた笑顔を前にした坂井医師は耐えきれず、瞳から涙が溢れ出した……。

コナンは驚き、坂井医師の顔を覗き込んだ……それを隠すように、自分の手で顔を覆い……涙を拭うと言った……。

「すまない……」

初めて見る坂井医師の涙を目にすると……コナンは視線を落とした……。

コナンは分かっていた……自分の行動が周りにいる人達を悲しませ

てるって事を…だけど、どうしても助けたい…坂井医師を泣かせる事になっても、その意志は変える事なんて出来なかった…。

「ごめんね、先生…僕、もう一度あいつの所へ行ってくるよ…」

もうこれ以上、悲しい顔を見たくなかったコナンは足早に診察室を飛び出した…。

vol.11 コナンの覚悟に流れる涙 (後書き)

こんばんわ

昨日の投稿で、結構分かってくれた見たいだったので、よかったです。

今回は少年探偵団にコナンが言い聞かす事になるので、そのセリフから本当に明らかになるといったのですが…もう心配ないようです。

実は、短編で書いた時、読者にも最後の最後まで内緒にしておくストーリーにしてあったのですが、連載にすると一気に読むという事が難しいので、明かしました。

書いていると、読む側に回る事がすごく難しいので、バラさなきゃよかったのって思ってしまったら、ごめんなさいww

でも、これから楽しんでもらえたら、うれしいです。

次回ヒント

笑うコナン

それでは、また明日会いましょう(=、(人)、(=)

笑っていてくれよ… (前書き)

今回はいつもより、短いです

二回に分けて時間をあけての投稿しようと思ったのですが、無理でした

その代わり、明日は長いですww

笑っていてくれよ…

「コナン君!!」

哀の病室へ向かおうと、足を進めていたコナンに歩美は声をかけた…。

コナンは振り向くと、淋しそうな表情をしたまま…視線を三人の方に向けるて言った…。

「ごめんな…隠していた挙句、こんな事勝手に決めちまって…」

「コナン君…どうしても?どうしても…駄目なの?もう、決めちゃったの??」

謝るコナンに対して、歩美は泣きじゃくりながらコナンに訴えるかのような声で聞いた…。

「あいつは…心臓移植しなきゃ死んじゃうんだ…だから、もうこれしかないって決めたんだよ…勝手かもしれないけど、あいつを守れるのは、俺しかないからさ……」

コナンは淋しそうな表情を浮かべながら、三人の方に身体を向けて言った…。

「だから、ごめんな……」

「コナン君……」

そんなコナンの言葉を聞いた三人は涙を堪える事が出来なかった…。

「泣くなよな…俺はさ、俺の前ではさ、最期まで笑っててほしんだ…」

「コナン……」

「頼むよ…俺の最期のお願い聞いてくれないか??」

そんなお願いをするコナンをみると、三人は何も言えず…ただ、涙を流すだけだった…それを見たコナンは微笑みながら明るく言った…。

「ほら、行こうぜ?あいつ、今一人なんだからさ…」

「うん……」

やっとの想いで返事をする三人は顔を見合わせると…コナンに精一杯の笑顔を見せた…そして四人で哀のいる病室へ向かった…。

笑っていてくれよ…（後書き）

今晚わww

今日は仕事始めでしたww始まりだと言うのに、仕事中心居眠り状態でした¥（／／／／／）¥

明日からは気をつけなきゃです（^o^）／

今回は、探偵団との会話でしたww

コナンの決意に何も言えない探偵団達は、なんだか、さみしそうです（T|T）＼（^-^）

書いてる自分が言うのも、なんですがww

次回ヒントは

諦めるな

です 今日から仕事初めの人、明日からの人も、まだ、まだおやすみが続く人も、残りの正月を楽しんでください（^o^）／

明日お仕事の人は、お仕事頑張りましょう

また、明日の投稿楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4767z/>

小さな運命共同体

2012年1月5日19時50分発行